刻む記憶

㊷ウズベキスタン

消えゆく湖、アラル海

干上がってひび割れた土地がどこまでも続くアラル海。以前は湖底だったこの場所には貝の死骸がたくさん散らばっていた=ウズベキスタン西部(撮影・村山幸親、共同)

「35年前、私はここに船でやってきた。近くの村は漁業と缶詰製造でにぎわっていた」―。

どれも赤茶色にさび付き、中には骸骨のように骨組みだけになった漁船が並ぶ砂漠の中で、ニコライ・アラジン(61)が言う。

人の膝丈ほどの草が点々と生える砂地が地平線のかなたまで続き、吹く風がそこに風紋を刻む。足元に転がる白い貝殻が、かつてここが湖底だったことを教える。

▽過剰な取水

ウズベキスタン西部の小村、ムイナクの北。「船の墓場」と呼ばれるこの地は、過剰な取水によって縮小が続く内陸湖、アラル海の悲劇を象徴する場だ。

ウズベキスタンとカザフスタンにまたがるアラル海は1960年代には約6万6千平方㌔に及び、世界第4の大きさを誇った。湖は沿岸の村の人々に豊かな魚を与え、ムイナクの缶詰工場もにぎわった。

だが、60年代以降、旧ソ連の農業政策によってかんがい設備の建設が進行。湖に流れ込むアムダリヤ、シルダリヤの両河川から綿花や米の増産のために大量の水が取水されるようになり、湖は急速に小さくなった。

船の墓場　かつての湖底、今は砂漠

縮小が続く内陸湖、アラル海の悲劇を象徴する「船の墓場」を歩くニコライ・アラジン(左)とバフティヤル・ジョリベコフ。かつて漁業で栄えたころの記憶を語る=ウズベキスタン・ムイナク郊外(撮影・村山幸親、共同)

塩分濃度が上昇し魚がすめなくなったために漁業は崩壊した。むき出しになった湖底からは大量の農薬や化学肥料を含んだ土が風で広範囲に運ばれて人々の健康を脅かし、農業や牧畜も困難になった。若者が都市などに出たムイナクの町に人通りは少なく、缶詰工場も廃業後、放置されたままだ。

「70年代にはほとんどの人が漁師だった。年間の漁獲量は5万トンもあったんだから。ここの魚は有名で旧ソ連中に輸出もしていた」と言うバフティヤル・ジョリベコフ(65)はウズベキスタン科学アカデミーの研究者として70年から、アラル海の環境調査などに携わってきた。

「川に多くのダムが造られたのが原因だ。縮小は90年代から急に進み、水質調査のために湖に設置した装置が翌年来ると湖の外に出ていた。でも、多くの人は関心を示さなかった」とジョリベコフ。

「後になって国連主導で国際会議が開かれ、海外の資金援助も行われたが、根本的な対策にはならなかった」

▽ダムの建設

カザフスタン政府は、北部に流れ込むシルダリヤ川にダムを造り、アラル海の北部を救うことを決める。「小アラル海」と呼ばれるこの湖は面積が増えて塩分濃度も下がり、魚も増え始めた。

ウズベキスタンも湖の手前を仕切って人工湖を建設。アラル海と切り離された湖では国際援助で運河が建設された後、小規模だが漁業が復活しつつある。

だが、この結果、残された中央部の「大アラル海」に流れ込む水の量はさらに少なくなり、縮小が進む。そのほとりは今やムイナクからはるか離れ、年々遠ざかってゆく。

▽最後の獲物

強い日差しに青く輝く湖面は美しい。だが、身を躍らせる魚もいなければ、舞い踊る鳥や虫さえめったに見かけない異様さが、心をざわつかせる。湖岸近くには大量の死んだ貝が転がり、どぶのような異臭を発する土に足がズブズブと沈む。

日本の大学との共同研究でアラル海の水質調査を続けるバチェスラフ・アバリン(50)が湖の水を採ってきた。「塩分濃度は海水より高く、これでは魚は生きられない」

そんな湖のほとりにテントを立て、異臭の中、懸命に何かを網ですくう中国人とウズベキスタン人の姿があった。

「採っているのはアルテミアさ。近くで加工し、養殖用の餌として中国に輸出するんだ」と労働者が言う。アルテミアは体長1ミリほどの小さな甲殻類で、これがアラル海に残された最後の獲物だ。

「変化に適応する人々はたくましい。開発前だってあるし、アルテミアをみても、まだアラル海の価値が大きいことが分かるだろう」とアラジン。

ロシア科学アカデミーの専門家として長くアラル海を見詰めてきた彼が湖に寄せる思いは強い。

だが、中央部に流れ込む水量が増える見通しはなく、そう遠くない将来に大アラル海は、豊かだった湖の記憶とともにその姿を消すことになる。

そして、自然がもたらす恵みの価値を忘れた人間の行為が地上に刻んだ大きな傷痕は、永久に消えることはない。

「昔はこのすぐそばまで湖があった。今のアラル海の姿を見ると泣きたくなってくる」とジョリベコフがつぶやく。

「死んでしまったアラル海のために」―。天の川がまばゆく輝き、満天を星が埋め尽くす空の下、眼下遠くに湖面を見下ろす高台のキャンプ地で、ジョリベコフは静かに杯を掲げた。

(敬称略)

=おわり=

記者ノート　自然の恵みの価値

地球規模で続く環境破壊の多くは、過剰で乱暴な天然資源の採取が原因だ。熱帯林の破壊、マグロやウナギの減少、地下水の枯渇などが思い浮かぶ。人類史上最大の環境破壊と言われるアラル海周辺の状況もその典型例だ。一部の人が期待するアルテミア漁も、自然から得られるものを最後の一滴まで搾り取ろうという試みにしか見えない。

短期的な綿花や米の増産にはつながったとしても、結果的に多くの人が安全な飲み水や食べ物、土地や生活の糧を失った。永遠に損なわれた自然の恵みはあまりにも大きい。失って初めて、人はその貴重さに気付く。

自然が人類に無料で提供してくれる恵みの価値を忘れることなく、それを末永く利用するすべを身につけることがいかに重要であるかを、アラル海の経験が教えてくれる。